

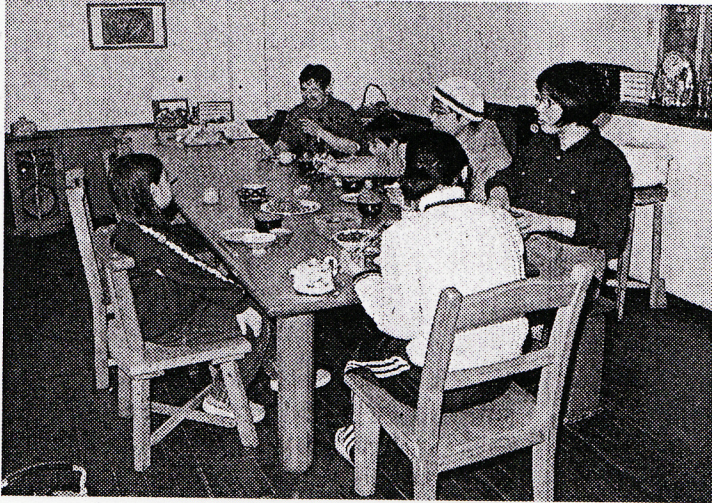
苦勞乗り越え「夢屋」5周年

障害者のよりどころに

一の宮町

阿蘇郡一の宮町宮地に喫本誠一代表、五人がオー
茶店を兼ねた障害者の小規
模共同作業所「夢屋」(宮
立以来さまざま苦勞を乗

仲間が集まって食卓を囲む。家庭的な雰囲気であふれている＝障害者小規模共同作業所「夢屋」



休日になると、近所の子どもたちが作業所の台所を借りてパンづくりをする

り越えてきた作業所は地域にも認められ、今では障害者が自由に過ごせる確かなよりどころとなった。

夢屋は手作りパンを製造・販売し、コーヒーも飲める共同作業所。元小学校教諭の宮本さん(三三)阿蘇郡

阿蘇町が六年前、自閉症の下原猛さん(三三)同郡一の宮町と「猛の進学問題を考える会」で出会い、猛さんの「居場所」をつくってあげたいという願いから、猛さんの母澄江さん(五三)と平成七年四月に立ち上げた。

「一の宮町には養護学校もなく、障害者が気軽に集える場所がない。作業所はぜひ必要だった」と宮本さん。徐々にさまざま障害を抱えた人たちが集まり、今では五人が通う。しかし

教師を辞めてまで取り組んだ作業所の運営は、苦勞が絶えなかった。

「障害者への偏見や誤解に苦しみ、それを打ち破るのに必死だった」と宮本さん。下原さんも「自閉症以外の障害者にはどう対応していかが分からず、戸惑った」と打ち明ける。経営も火の車の状態が続いた。

それでも二三年前からパンを買ってくれる固定客ができてきた。地域の人々からも徐々に認められ始めた。親子連れが休日に作業

所の台所を借りて、パンを作ることも。作業所は、障害者が好きな時に来て、皿洗いを手伝ったり、漫画を読んだりと自由に過ごせる空間としてなくてはならない存在となった。

作業所に通う女性(三三)は「いつ来てもみんなが温かく迎えてくれる。自分らしく過ごせて居心地がいい」とにこやかに話す。

宮本さんは「始めなければよかったと思うときもあった。しかし、ここが彼らのよりどころとなって、楽しく過ごしてくれているのを見ると励みになる」と屈託なく笑った。